

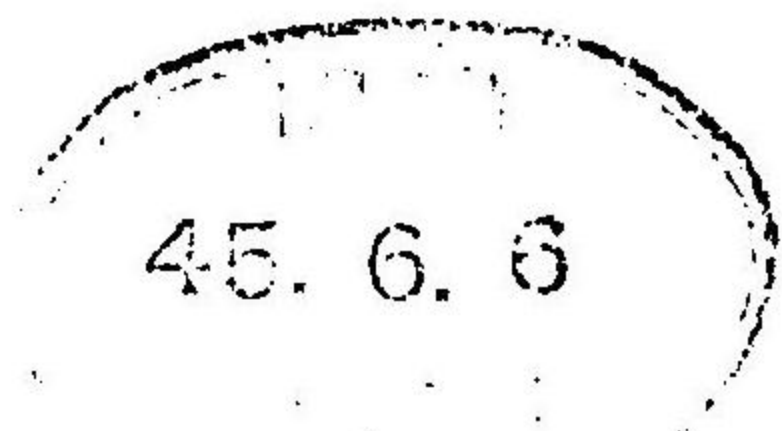
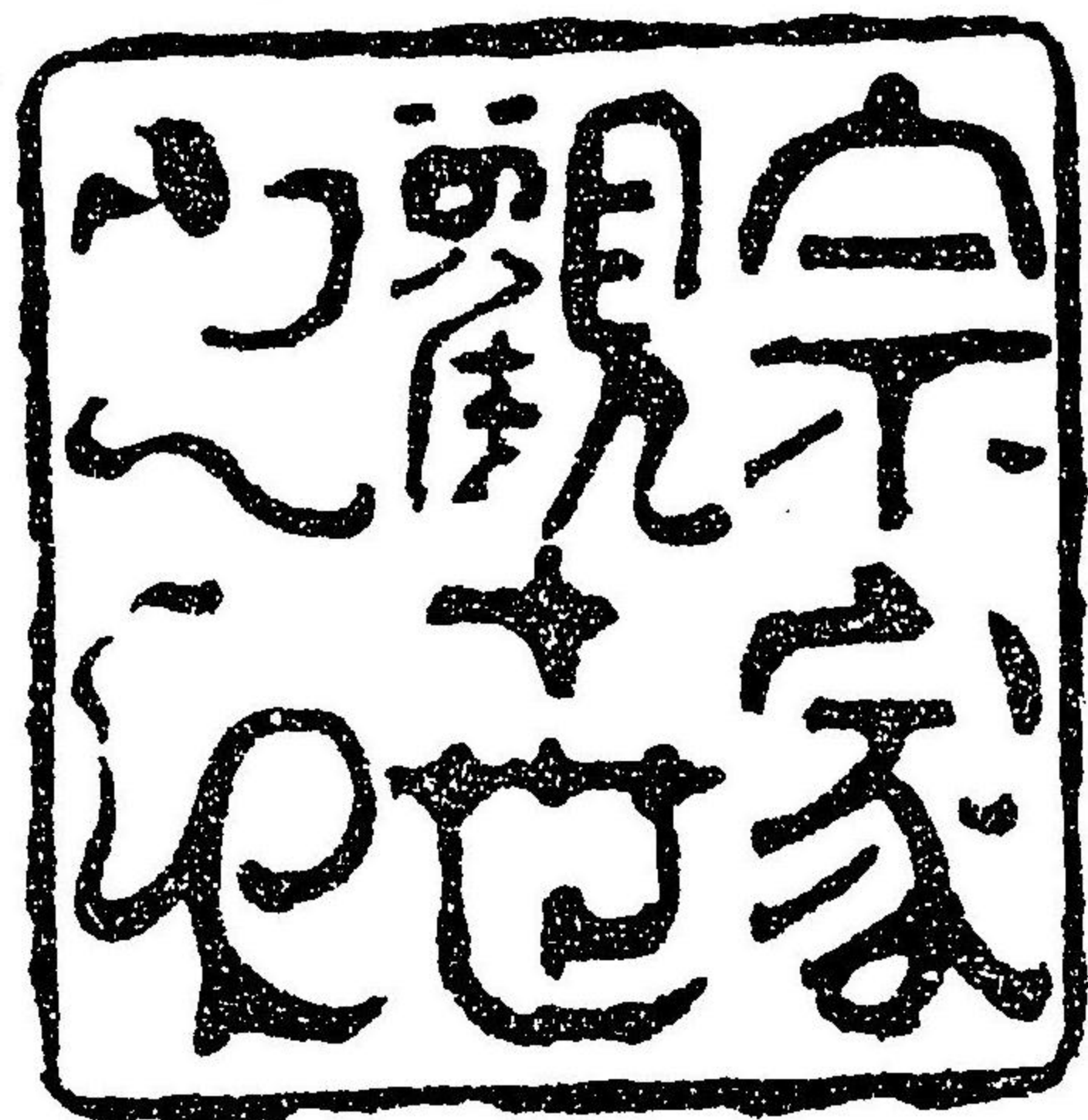
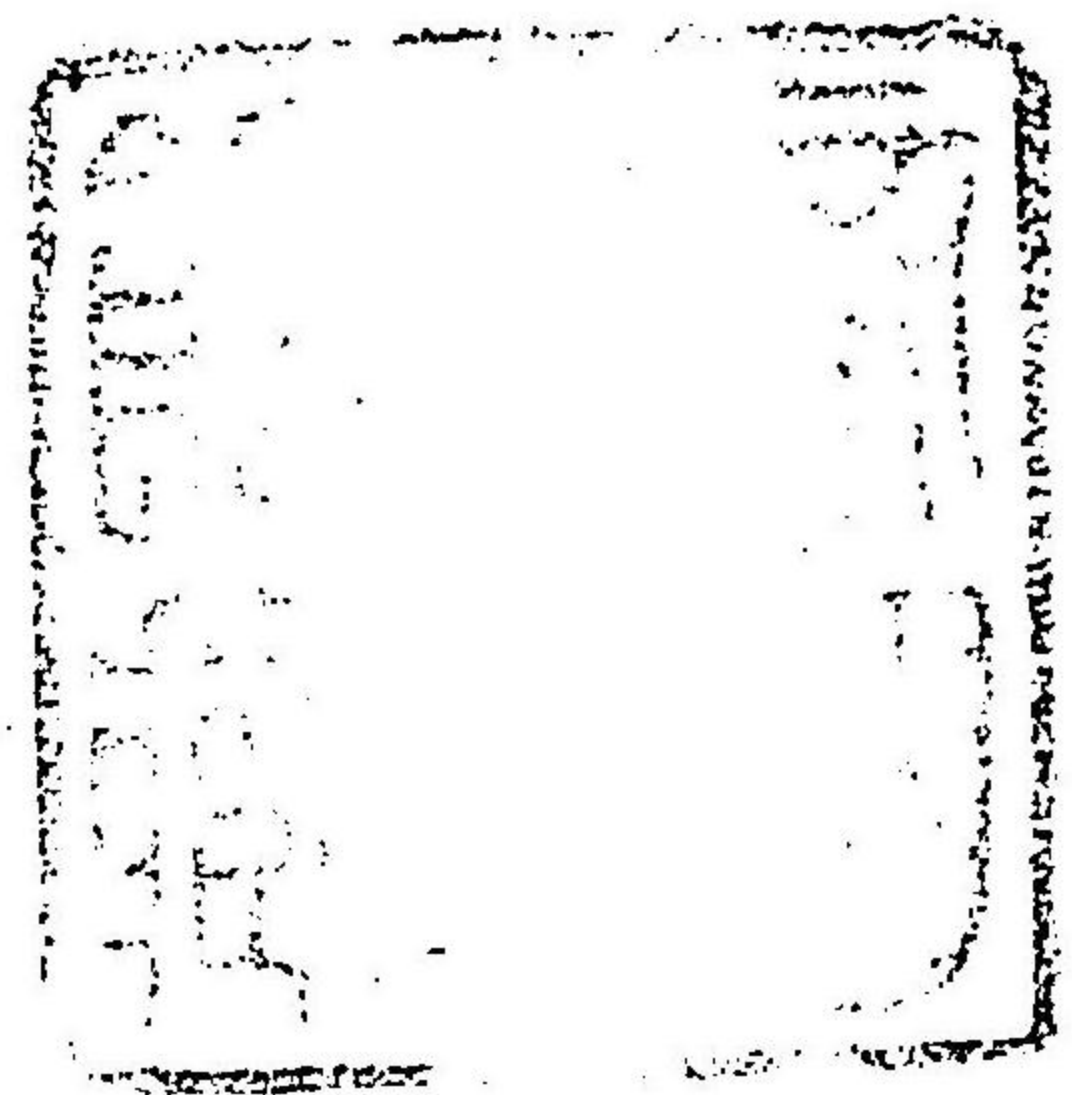
特 12

8

445

張良
履生門
鉄輪
藍染門
雲雀山
五

2
533



九月 五番目 畧服終

張良

シテ 黄石公
ワキ 張良

二月 四番目 畧番目 又 切條

冠生門

シテ (註多) 祢
ワキ 賴光
同 保昌
同 立

九月 四番目

鉄輪

汝テ 鬼女
女
ワキ 晴明
能 祢官

季不知 四番目 畧服終

益津門

汝テ 天女
祢
子方 梅千世
ワキ 祢主
ト 宿亭主

四月 四番目 畧番目

雲雀山

シテ 女
ワキ 梅千世
ト 祢主
ヒ 宿亭主
ワキ 梅千世
ト 祢主

張良

早向
其の漢高祖乃陛下諸良の勢也
其の程は陸ありて乃ち其の威也
其の道多し乃ち口より下都と云可
了去橋あり彼去橋は行と云くや
本より一入者老翁馬と云くは
邊彼者乃ち其の爲一其の

張良

さるやのしるし者も我もむし
かくらて思のしむたが斗か乳父
是きのならしむる老たるを貴し親
と極ひ皆絆のくみせて作それ
射候者も換体候乃志ありとて日
より五日子當らし目らて来斗無法
乃大平と傳ふまのし申と夢さ

めぬおしく日評考公も今日五日
相高里候程子。明今下郡去橋と
急候たりに上五斗乃天毛のゆきぬ
能やれそ手と行候と道ぬを
山乃をも考らる度斗るの波也下郡
代去橋は急はなりく荒おそ
あきりやいら張良筆卷るものと

契り物まゝの出来事やた
 ぐしぬ棟を先刻より家にてまゝり
 曉鐘とてかろへ侍つるも其時刻
 手杖乃をまのひまをりもか
 るれしくは誠乃心よりあらば念
 より五日の満らしそは日安さく哉
 らば棟をまゝにあらば出合やぐ

持く杖出しく傳へんれは終に張良
 やいしをまゝとあらば老翁のまゝに
 にはせよまゝりく史 言智道新
 此亦は機徳をてふにいた。又棟をから
 かのごとく行細まゝらぬ業平
 かやうは忍隨ふ方其故なきよぬ似
 たまはたたりと傳へく業世のこ

無^カ法^ホの^シ解^シと^シを^シれ^シと^シ思^ハふ^ルは^シ深^カ
 心^コを^シ為^スと^シく^ク志^シす^ル海^ノを^シう^ラら^シと^シ
 あ^ハら^シう^ラあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 志^シす^ルあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 己^ノ一^ノ聲^ノ乃^シ去^リ露^ノ窓^ノよ^シあ^ハく^ク巴^ノ峽^ノ秋^ノ
 ぬ^ルう^ラあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 吟^ミま^シ山^ノ路^ノ耶^ノ有^リ明^ク月^ノを^シ隈^ニ

あ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 も^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 ね^ク霜^ノ乃^シ白^クま^シ河^ノを^シま^シは^シて^シ乾^クぬ^ルま^シ
 渡^リし^テ人^ノの^シ跡^ノを^シれ^テあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 き^スも^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 て^シま^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ
 を^シも^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シあ^ハら^シ

後

大瘧

西

黄石室^{クワタ}と^{セキ}り^{コウ}る^{コウ}老^{ロウ}人^{ジン}あり^{コウ}愛^{アイ}に^{カシ}漢^{カン}高^{コウ}
 復^{フク}の^{コウ}下^ゲ張^{チヤウ}良^{リヤウ}と^{コウ}老^{ロウ}者^{シヤ}あり^{コウ}公^{コウ}程^{テイ}所^{シヨ}
 名^ナく^{コウ}君^{クニ}臣^シを^{コウ}松^{ソウ}り^{コウ}義^ギを^{コウ}今^{イマ}も^{コウ}
 去^キて^{コウ}さ^{コウ}る^{コウ}た^{コウ}ま^{コウ}く^{コウ}質^{シツ}女^{ニョ}人^{ジン}は^{コウ}あ^{コウ}え^{コウ}惡^ク
 量^{リヤウ}勝^{シヨウ}き^{コウ}國^{クニ}と^{コウ}治^チめ^{コウ}民^{ミン}を^{コウ}あ^{コウ}ま^{コウ}む^{コウ}
 心^{シン}けり^{コウ}天^{テン}道^{ドウ}は^{コウ}通^{ツウ}り^{コウ}て^{コウ}忽^{コト}と^{コウ}
 法^{ホウ}を^{コウ}心^{シン}に^{コウ}感^{カン}應^{オウ}ま^{コウ}は^{コウ}あり^{コウ}大^{ダイ}事^ジ
 夫^フ

を^{コウ}傳^{デン}へ^{コウ}て^{コウ}き^{コウ}祖^ソは^{コウ}所^{シヨ}ス^{コウ}
 ら^{コウ}げ^{コウ}味^ミ方^{ホウ}を^{コウ}い^{コウ}ふ^{コウ}め^{コウ}天^{テン}下^ゲを^{コウ}治^チめ^{コウ}む^{コウ}
 う^{コウ}中^{チュウ}あ^{コウ}り^{コウ}て^{コウ}世^セは^{コウ}傳^{デン}へ^{コウ}ん^{コウ}を^{コウ}弱^{ジュク}く^{コウ}も^{コウ}や^{コウ}め^{コウ}く^{コウ}
 来^{ライ}り^{コウ}は^{コウ}張^{チヤウ}良^{リヤウ}も^{コウ}か^{コウ}り^{コウ}た^{コウ}れ^{コウ}バ^{コウ}
 あり^{コウ}て^{コウ}替^カり^{コウ}る^{コウ}公^{コウ}は^{コウ}粧^{シヤウ}ひ^{コウ}眼^{ガン}を^{コウ}老^{ロウ}り^{コウ}
 主^{シュ}あり^{コウ}と^{コウ}さ^{コウ}ら^{コウ}ひ^{コウ}法^{ホウ}も^{コウ}や^{コウ}く^{コウ}威^イ勢^{セイ}
 不^フ忍^{ニン}を^{コウ}く^{コウ}橋^{キョウ}を^{コウ}下^ゲり^{コウ}後^ゴに^{コウ}後^ゴ

張良

張良

新・ハコ・ニ・テ・白
虎・リ

幾・も・物・の・め・付・給・ま・の・ま・む・し・
村

張・良・を・あ・ら・う・の・衣・冠・正・し・
く・別・給・る・也

出・橋・と・寢・ま・し・う・の・ゆ・き・也
天・晴・筈

量・け・人・狩・う・あ・と・思・ひ・な・が・ら・ま・い・
夜

心・却・見・む・と・石・云・々・も・し・
ま・く・の・を

馬・よ・の・や・う・く・を・お・も・う・
の・お・も・う・

乃・は・張・良・屋・を・い・く・
あ・り・流・る・

皆・誰・と・も・ま・い・れ・も・
可・き・下・郡・乃

衆・之・も・同・は・思・え・
た・ま・ら・ん・也・ま

衆・の・矢・野・村・を・あ・ら・
う・落・る・水・は・う

ま・ぬ・志・の・と・無・慮・を・
皆・と・さ・る・ま・様

こ・う・か・う・る・ま・き
上・目・不・思・
也・也

浪・立・油・り・
俄・に・河・霧・を・さ・ら

心の浪間よ出ぬ地絆乃のまがひ
 目もさくからむおれ流る皆好あり
 多して面をさらひありを中張良
 かわづつとたを抜きちく地所
 外に大地の原るまのまりにおれ
 持たざる皆流指しおせざる皆と流るり

剣を納め又の岸よえりやとあがり信
 彼皆流の出るまのまにせむれど
 石公馬よるとおれはちりきまの去
 ありても汝善哉くも彼巻をとり
 出張良よあり給ひるまのち
 披手ありく身見し秘曲口傳を
 疎きつと入る大地の観音乃

再サ態タテあアんンぢチがガ心ココロ強ツヨクんンたタめメあアまマは
今イマもモもモ及およびビ守ウケ護ゴ神カミとト成ナリつツと
大オホ地チのノ雲クモ弁ヒラはハ撫ユス子コのノ名ナもモもモの
高タカ山ヤマのノあアらラりリのノ金カネ色イロはハ老オシりリをを處ココ
空ソラよヨもモれレどドもモもモちチ深フカくク黄ワウんンと
あアらラのノのノろロろロ子コぞゾ者モノ難ナシまマ

誕生門

早ハヤ上ノ原ハラ 後ノチのノ都ミヤコとトてテくク風カゼをを音ネををぬぬ
喜ウレシへヘのノれレ具ツグ志シ保ホのノ頼タカ光ヒコとトのノ神カミをを
あアまマのノ板イタをを丹ニのノ大オホ江エ山ヤマのノ鬼キ神カミをを
たタぐグへヘのノまマのノ学マナブをを家イヘのノ末スエをを忍シノびビけケ細ホソ
まマのノあアらラのノ日ヒ夜ヤ朝アサ言コトのノ集ツク会イ申マシ
作ツクのノあアまマのノあアらラのノ暗カクレまマをを平ヒラらラえエぬぬ

ガクマをい説あひるは法人はま
まはあろ意城よりくあまやの
さゆさけ心表ひるのあははまの
まじり頼まあは中は酒宴裁少たまふ
らる乃そこひあく唯うあまけくはま
つきことゆりまう存膏は雨曇を
ま夜の如借上教先志れく空禁乃花も

二日九八入
あひもうたふれあ井に面をめで人
心隔ぬ中表あまをまはたき一ゆや
まろともはあむありてかえらん銀は
まあはあましくは程子。皆ちあう
寄て所如借へ最ては信まてふ
程子。皆ちあう御集り作入の
保昌
作は程あはらうまらあかくらうた

保昌は不思議ある事と申す先條に羅生門
子鬼神の事して云くわが人衆通らぬ
よと申す保昌申す事なり
あはれ白き事な羅生門の南門から
申すも木も種大君の玉ありて
保昌鬼の事して云くわが事なり
だに鬼神の事ありて保昌事なり

もあらはれかゝる事ありて保昌事なり
保昌 保昌の事ありて云くわが事なり
百保昌の事ありて云くわが事なり
まこと妙し事ありて云くわが事なり
あはれ保昌の事ありて云くわが事なり
保昌の事ありて云くわが事なり
保昌の事ありて云くわが事なり

後邊乃綱の喉かりそめは只論はあり
鬼神を凌ぎと入んたあよ。地乃具
かへりけおのまの曹は緒と志の家
付衆を力と地。地を馬より打
衆く合人をも修き花唯騎宿
さあて二条大宮跡南からよあめ
夕り上る雨もあもあなるにさく

あつぐ鐘もあつぐ曉。東寺
あつちさく丸をたきてはつて出
死生はとらふはあつちさく雨
俄に少なる風は多し駒を走ら
高き地はあつちさく社を
これ其時馬と衆を形く
門表石壇はあつちさく社を

出らんは立お子孫らんとまゝなり
 引らんよと胃は鏝とつんで引あせ
 其の鬼神とた刀杖のまきらんや
 するにたたる曹の緒さうちぎつてお
 何れも壇のつゝあつたりき上かて鬼
 神のいると坪あつてつぐ物る曹
 角を投捨其長からんは斬ひ

々々两眼目にはく網とあらんで
 きてりもさし網あまわらた刀は
 かぎく女からまや玉地やかまを
 天舟のつゝあまをてかまを鉄
 杖よりあまをらと打たれちがひ
 とつてからつてくはらあ
 うで打あまをさしひらき刀をう

羅生

六

申さまもやと存候^上目も救^下り候^下と
 存候^下もく^下貴希^下孫^下の家^下子^下事^下ら^下孫^下
^上家^下も蟻^下の家^下子^下あ^下れ^下た^下る^下駒^下を^下居^下ま^下く^下た^下
 二^下道^下か^下ら^下ぬ^下あ^下ら^下ん^下と^下頼^下ま^下し^下と^下社^下思^下ひ^下
 不^下ぞ^下と^下候^下候^下の^下由^下候^下志^下ら^下で^下契^下り^下そ^下あ^下
 不^下悔^下ま^下も^下呪^下縛^下ら^下れ^下心^下安^下り^下候^下を^下
 松^下も^下も^下の^下ま^下は^下は^下貴^下切^下孫^下の^下宮^下不^下

ま^下う^下で^下つ^下ま^下む^下ら^下ひ^下ま^下あ^下り^下松^下あ^下ら^下世^下貴^下
 ぐ^下あ^下ら^下報^下ひ^下を^下ん^下を^下候^下と^下ま^下ら^下孫^下
^上歎^下く^下貴^下命^下孫^下の^下中^下く^下あ^下ら^下の^下ま^下ま^下を^下ま^下を^下
 か^下も^下ひ^下あ^下ま^下した^下る^下道^下の^下ま^下を^下ま^下く^下よ^下ら^下ん^下を^下
 た^下ら^下ひ^下の^下か^下ま^下ら^下ぬ^下お^下も^下ひ^下は^下池^下に^下ま^下り^下池^下
 い^下ま^下ら^下ひ^下あ^下ら^下ら^下た^下分^下れ^下ま^下え^下ん^下程^下と^下也^下
 草^下ら^下ら^下ふ^下市^下原^下野^下邊^下の^下露^下の^下く^下月^下

通^ホま^イあ^コの^ラら^ハ渡^ガ橋^クと^スら^ハた^ス事^ト
 平^イな^クき^キ布^フ祿^ルの^ミや^ハ遠^トく^シ
 石^イ程^チの^キ歩^ブ布^フ祿^ルの^ミや^ハ遠^トく^シ
 金^{カネ}指^{サシ}は^ラる^キの^ミや^ハ遠^トく^シ
 乃^ノの^ミや^ハ遠^トく^シ
 其^シの^ミや^ハ遠^トく^シ
 子^コ蒙^{モウ}て^シん^シの^ミや^ハ遠^トく^シ

成^ナる^キの^ミや^ハ遠^トく^シ
 其^シの^ミや^ハ遠^トく^シ
 火^ヒと^シて^シん^シの^ミや^ハ遠^トく^シ
 所^ト成^ナる^キの^ミや^ハ遠^トく^シ
 て^テ昔^{コト}の^ミや^ハ遠^トく^シ
 昔^{コト}の^ミや^ハ遠^トく^シ

任者^{ひん}ま^まの^の精^{しやう}に^に同^{どう}う^うち^ちつ^つる^る夢^む見^み
 阿^あ志^しく^くの^の程^{ほど}よ^よ。清^{せい}明^{めい}の^のま^まと^と立^た神^{かみ}度^ど
 の^の様^{よう}を^をも^もう^うら^らあ^あを^を申^{まを}さ^さや^やと^とあ^あの^の
 夢^むの^の事^{こと}あ^あら^ら。誰^{たれ}ま^まく^くわ^わり^り作^{しや}ぞ^ぞ
 阿^あ母^ぼま^まの^の下^{しも}下^{しも}家^か邊^への^の者^{もの}ま^まの^のが^が此^こ程^{ほど}う^うち^ち
 へ^への^の多^た見^み悪^{あく}の^の程^{ほど}よ^よ。考^{かう}や^やも^もした^{した}
 ぬ^ぬの^の事^{こと}の^のて^てら^ら。羞^{はづ}れ^れ不^ふ思^しひ^ひ也^や考^{かう}や^やた^た

及^{およ}び^び是^この^の事^{こと}の^の恨^{うら}み^みと^と悔^くい^いと^と蒙^また^たる^る人^{ひと}
 ち^ちの^のお^おま^まの^の夜^よを^をう^うち^ちの^の命^{いのち}を^をあ^あ
 ぢ^ぢの^の公^{こう}を^を殺^{ころ}して^{して}作^{しや}さ^さな^な様^{よう}の^のサ^サ
 ち^ちの^のお^おま^まの^の行^いや^やの^の陰^{かげ}申^{まを}す^すに^に手^て我^{われ}
 切^き妻^{さい}と^と別^{わか}れ^れ。あ^あら^らま^まの^のお^おま^まの^のう^うら^ら
 たら^{たら}ひ^ひて^てら^らの^のま^まの^のた^たの^の心^{こころ}を^をあ^あま^まの^のサ^サ
 ぬ^ぬの^の事^{こと}の^のま^まの^のお^おま^まの^の命^{いのち}を^をあ^あま^まの^の佛^{ぶつ}

神子新敷つきの命をてあは究キタツ
 ての程子基調法よの叶ひさく依テウホフ
 是迄事り所目子息より社業に男
 依ひるに然るまは初ヤウは初ゴキ合チ有てル
 依の初コキ此上コキの行コキて所命テシと物テシ
 去てて参るまうまはましく命コで信物グモツ
 を所調トク依入トク日長トクてのコキらでコキ物テシ

えんまきぢり人形コキと人尺コキは伊予コキ夫婦の
 名字コキぢりちよこめと重コキは首コキ高コキ是コキ此
 幣コキおのく信物コキと調コキ入て肝膽コキとくぶ
 手新コキ型コキの謹コキ上コキ毎コキ拜コキ友コキ天コキ用コキを地コキるコキ度
 所コキよるコキものるコキ伊コキ装コキ話コキ保コキ装コキ冊コキのコキ夫
 乃コキ無コキ倉コキありてコキはコキまコキくコキまコキひコキあり
 よるコキ男コキ女コキ夫コキ婦コキ乃コキらコキとコキひコキをコキあコキ陰コキ陽コキ

乃道あまの傳りてれはまんごう天驅カ
 鬼神キ妨シをのサ非業ヒの命ノをシらんカ也
 大正ル神シ祇シ諸佛ノ善ク蔭カ明王ノ都ノ天童ノ
 都ノ九曜ノ七星ノ二十八宿ノとシ行ハるカ也
 了ス初ノまシびシすマまシやノ雨ノ降リ風ノ落シ神ノ鳴リ宿ノ
 妻ノ頻ニ又シちシくシ御ノ幣ノとシばシあリはシ啓ス動ス
 志スくシやリはシ毛ノよシもシちシてシ松ノ夜ノ也シ

刻シたシはシ斜ノ膝ノ乃シ後ノ風ノはシちシきテ同シ
 志スくシ暮シ暮シたシ風ノちシちシ月ノ東ノ出スり
 出スくシまシくシ西ノ窓ノはシ陽ノをシぬシてシ業ス
 かシのシあシくシ因ノ果ノ車ノ輪ノめシぬシあシくシ
 我ノよシうシちシくシ人ノぐシまシたシちシまシちシ報ス公ノとシ
 名ノをシ懸シ子ノ也シ窓ノのシ牙ノめシうシまシちシあシまシ
 蛇ノ舞ノはシまシ志スくシあシ水ノ煮ノ青ノ地ノ鬼ノ

抄^{シテ}之^{キル}布^ブ衾^キの^チ行^{コト}殿^ノの^ニほ^スる^ハ火^ビの^チか^ウる^{コト}
 い^クも^シ鐵^テ輪^{リン}の^チあ^レれ^ルほ^ノか^ハけ^テ赤^カま^シ
 鬼^キと^シ成^ル所^トも^シ男^ヲの^チ枕^ヲ子^ヲより^シて
 女^メ子^ノま^アの^チご^シあ^ツら^ヤ也^ナ上^ノ恨^ミめ^ヤ也^ナ身^ヲ
 と^契り^テ其^ノ時^ニ空^ニを^椿を^以千^付付^テ塚^ト松^ト
 乃^モ急^クけ^テか^サら^シと^コう^松ま^りに
 都^ロも^松の^果松^らん^あら^うあ^や也^ナ

申^テて^ラれ^テ捨^テら^れて^松ま^り思^ハ白^ク思^ハる^{コト}
 後^ニは^志の^チ人^トと^う人^トと^素と^から^ち
 有^ル時^ノ意^ヲ又^モ恨^メめ^ク松^マり
 て^モ狂^クも^志れ^思の^チ因^ニ果^ト今^もぞ
 悲^シら^ず言^ハま^えむ^命を^シよ^シぞ^もい^ふ
 も^やあ^の思^ハぬ^もあ^らね^ば
 人^ノの^あら^ぬあ^らぬ^あら^ぬ

あひ絶えあきらまたよもあよわ
車けめがらあつてふ子の時節と待へ
やえ此度かへるねんといふき年ぬ
あつたにまてえていふ舞をうまひえて
深め目よれえぬたおとろありぬま
めはたえ思見と成まを中

鐘

カ

蓋深

上
あまのまの草たはなはあはく
人乃面をき 是を一条今出は
任女まぐの空もあつた契りよて
心とまはなはる人け袖まきうあう
ま申はうとくあつたものまてぬ免に
平角はもあらはあつたは子か為よ女を

カ

カ

ちひ絶トちトらト平トたトもトあトよトわ
 車クルマけケめメちチ中ナカにニほホふフ子コのノ時トキ節セツをヲ待マてテ
 やカえエ此コノ度タビをヲかカへヘるル細コいイ子コをヲ平ヒラのノ
 けケのノうウにニまマをヲえエてテいイふフ聲コエをヲ中ナカにニかカえエてテ
 深コのノ目メ子コをヲえエぬヌ杖ツチをヲさサうウあアりリはハまマまマ
 ぬヌにニかカえエ無ム鬼オニとト成ナるルをヲ中ナカにニ

盃深し

上ウヘ身ミ人ヒト
 意イまマのノ草クサ下シタはハ名ナはハあアらラにニくク思シふフをヲ
 人ヒト乃ナラ面オモをヲ是コノをヲ一ヒト条ジョウへヘ出デるルはハ
 任ニ女メまマくクのノ旁ナカにニあアるル契ケギりリとトてテ
 心ココロをヲさサへヘしシ所トコロをヲ人ヒトにニ袖スエをヲさサうウあアらラ
 手テ申マカはハらラくク成ナぬヌがガのノまマをヲてテ免マカにニ
 交カ角カクはハもモあアらラはハ何ナニがガ子コがガ為ナりリはハ女メをヲ

作へ^サら^サは^サ中^サ作^サ此^サ前^サは^サ宰^サ府^サの^サ作^サ
 主^サ殿^サと^サ中^サ人^サの^サ後^サり^サ作^サら^サ申^サは^サ多^サ
 け^サは^サ業^サ乃^サあ^サる^サに^サは^サく^サは^サ屋^サの^サ我^サも^サを^サ
 法^サ内^サ乃^サ者^サあ^サて^サる^サ都^サより^サさ^サて^サけ^サ
 と^サつ^サら^サり^サて^サる^サ神^サ主^サ殿^サへ^サ事^サら^サ勢^サを^サ起^サし^サ
 て^サ給^サり^サら^サう^サ母^サ子^サは^サは^サら^サり^サさ^サり^サ作^サ
 獲^サく^サ毎^サて^サ事^サを^サ起^サし^サら^サう^サ母^サも^サあ^サて^サる^サ女^サら^サ

う^サが^サも^サあ^サら^サり^サけ^サ文^サと^サ事^サら^サ勢^サ作^サ
 出^サな^サ事^サと^サと^サり^サさ^サり^サ久^サ入^サ心^サあ^サ
 申^サ候^サ。^サ後^サの^サの^サ出^サむ^サが^サ神^サ主^サ殿^サへ^サ申^サ上^サ
 上^サの^サ子^サ細^サ者^サと^サ事^サり^サて^サる^サに^サは^サく^サら^サの^サ怨^サ
 事^サを^サ起^サす^サる^サ都^サより^サ女^サ性^サ接^サ人^サ乃^サ我^サ
 事^サは^サ宿^サの^サは^サめ^サり^サ作^サら^サけ^サら^サと^サ神^サ主^サ殿^サへ^サ事^サ
 事^サを^サ起^サす^サる^サ母^サも^サあ^サて^サる^サ女^サら^サ

よき事なればこそ申す事なればこそ
某が屋敷に居る言附新に後
乃此中よとあるはほとそとあ
オキ 果しく命はらうやぎく進出
あうきおきく台 申に後人申候
唯とて父と神皇殿の御目に多き
ゆへに徳とあるをそと終りて作る

ては坊へ入 貴うおとまき御座
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
まおきく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う
ゆあはたらうやぎく御座をそと又う

死に心づいてのこころをいかに
 道への便と頼む木陰へ今うめを
 才と成つて思ふはけく独り子
 一墨のまじり少くも女はか
 所痛うらなを神皇殿よりけり
 巫申あふのひさしあての問答
 屋とせし行方へ毛出有う
 せり

多く作らば梅千世 行方
 兼都のむらしり人目さす
 舞はあまのむらしり人目さす
 とおもふありねはははははは
 りや母の所をさす心まじり
 歌をよみよみよみよみよみ
 こころ習ひのむらしり人目さす

母はたまにけり可き母が御心を
終へ母は位と被と思はれらるべく
悔り給へ母は今結限りあきしと下安
あらぬ思ひはきかまよからまぬ袖の
聲ひ子留ら給へ親出給へ
思ひわづら母身はくは手跡は
や日る祀えぬ今乃う手は身か象に

角お母らん送ぬ袖給へと名をのめら
目く蓋深しは身跡は給へく
何とやらぞほおをぬらん人乃身とあき
たると申か母は換ちる者ぞまよえん
たやと母のやを病道断らぬもの
うとあてくば某が可なり多りた
お世ましく候らぬはち梅を成

痛後より然るも 是の宰府の非
至はくは我世同の油可よひて是を
み海り作あらしきや 是の無澤のよ
人乃松多く集りて公の行子にく公
らむ屋振量申して公某油可よ作
何の網をひくおとぬ作しうに彼ら有
由前なる 是れ無澤のよ人の多く

集く者の網をより引く教は禁の
乃可きくあるは是に公の言はあれ
るに付人 是く公の言はく神皇殿
は所出きて有る網をより引く教は生まん
だん乃可きくあるは是に公の言は
まの行し人は公と授るは公の
たの耐きく後の公の言はく神皇殿の

思出ある人志出事り者多くげ瑠を以
申入^{サコ} 心得^{サコ} 作^{トモ} りに中^{サコ} へ作^{トモ} 網^{アサヒ}
てぬあく作^{トモ} 人の男と投^{ナゲ} たる由^{トモ} 作^{トモ}
あまに^サ 伝^サ へて^サ 謂^サ へ^サ たり^サ 申^サ
おとく^サ 身^サ 入^サ 事^サ り^サ しく^サ 申^サ へ^サ たり^サ
厨^サ 牙^サ と投^サ たる^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ
た^サ 作^サ 三^サ 毛^サ 一^サ 毛^サ の^サ 人^サ 也^サ

書^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ
た^サ 申^サ へ^サ たり^サ 言^サ 語^サ 首^サ 都^サ よ^サ り^サ
を^サ 下^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ
者^サ 多^サ 有^サ 者^サ 多^サ 有^サ 者^サ 多^サ 有^サ
申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ
者^サ の^サ 子^サ に^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ
申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ 申^サ へ^サ たり^サ

...

...

みちたより一ヤシテ終く終りの人
長くゆきまきまきとらへるは終せら
き度の一は終り人子也是の母
所けは形はまきと終りまきまき
率終所終りて終りて一ヤシテ終り
おまきまき終り終りて終りて終り
る 日まき梅子せがらへるまきまき
まきまきまきまきまきまきまき

おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまき

終り

終り

小市ひくまききく一奪入て我恨
三途家らひかくらも平生其
色家母父ああらびうい
あらた小眠りてまあささひらく子
な一婢始力星髪乱まじく茶根
小まこりる色んおまゆすま
巻く面やけあ子力果をま

紅顔をて清く華靡を失へり
乃鬼らひく子独起く者根あを礼
むくあくたさこん風邊平
終不借りまき都急行果之思
や心は疎らんしはるは府母の
乃心中銀は不便は方内院時力幣帛
七持をかしこんとてあ教者命と三

あまの庵とむまひ多角痛かりた
佐。若程は侍後と平乳母の妻のあまの
花と手拍杖の茶の死と死く里の
出世来の人の具と付あ。飯姫君
とまご申作。き子侍後とよひ出
里。下たつやとあんなん中んまひん
行。まごのそ。け。ま。又。里。出。公。

あらの姫君の所。眼とまご。一。や。て
は。眼と申。里。出。行。い。う。申。秘。わ
事。た。ま。き。平。里。出。て。お。め。り。と。一
突。や。ん。さ。う。煙。を。て。春。は。目。の
くら。あ。さ。う。塾。家。子。燭。き。え。て。秋。乃
友。程。ま。ご。家。貧。に。て。お。親。急。す。く
あ。く。賤。子。の。才。の。故。人。う。あ。り。ま。ご。

未だ平らうらへりあきり 金剛人を
いづるまじきものたすせむ地
号よくかたむけむり山からさら
も心のあやもさでた道せむ地埋
草露のほぐれあらましく
かくて煙たえくく霧り霞
うぎ平らうらへりあきり 金剛人を頼ま

むと草は戸ほそと引あてり又里社
あはきれくかきく嶺の雲雀
山くあさるやろ成らん 二花の
横状の右方豊成と神也引れ
狩場を四季は遊びきり時物帯は興
とまひ あつたあまのまきれく
霞む外山雲橋を雨降まぬあが

くはゆるしも花の舞蔭もやと舞
梅も月もあはれも雪もあはれ
の三葉もしやと天の川を
雁は道なきくはら侍花
ききしらの香はききし人乃袖
の香もよもや昔も君のため故
あゝ事とありありの國は

そり種も君は為も父ある花を
手折つてはもよもや花は身を
残もよもよも思の葉はくろく
てぎくおの花の杜若 ぬらしたる
むらさき草は 今もあはれ花は
月も花は月もあはれあはれ
もよもよもあはれあはれ

乃凡ほころび又躑躅の夜花乃人
の物とえくたごうくまは夢乃申胡
蝶也あそび交書はめでしも三は是
ころ乃花のらまや 実花きあま
俊花乃夜春は心惜し人 名申
さのらま色しあや 夜乃まきわ夜あ
う子のなよぞ有まをまきわら
カ

六

六

如も春の隔つは若ののら夜ま
面歌のそあかやよ身乃夜う
迄乃たう人まきくあされま
花乃あご鳥とらうらも今乃思
乃夜まよま茶はきけま乃夜野
を乃よは出しきしもあらに人
まの百あうちてあまし
カ

六

六

おの初も我姫よーあ子も乃鏡養よ
よ里矢の如た智なまの由と安及悔
ま根叶のび城やねとこが斗ひして
此ひもりの出乃宮陰よ業乃唐と結ひ
陽一置ると海乃一吾城一からぬ
およ今あこもとたさく社梅めとねま
姫のけくみあおと所まひ中入

目長の位も梅海えぬ如入の如しを跡
那ひありて矢の位中梅は行
よこも世にまーまのまのふあろ
ありとても今何所才まの業乃
志のえまお姫のまのらまぬあ
なり行せら事おらんまの
まのの事あれとも先非と悔の文が

目録

乃都の重様はさくら道ぞめでた
まはるくみちぞ目出なま

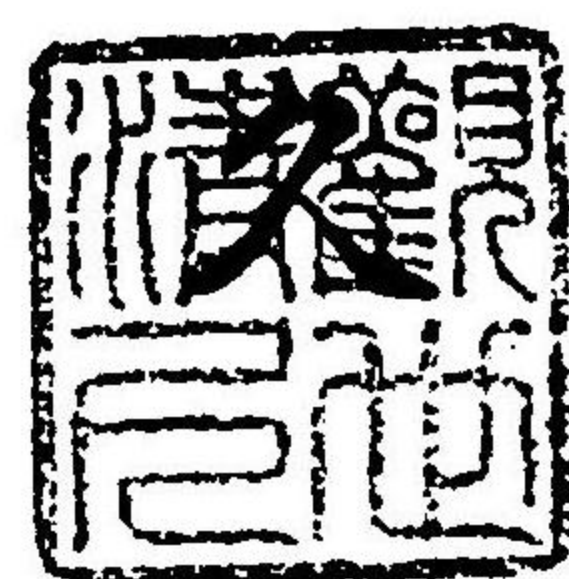
一巻

255
533

復製不許

明治四拾五年五月二十五日印刷
同 年五月三十日發行

再訂正者 觀世清



發行兼 印刷者 檜 常 之 助

京都市上京區二條通麩屋町角

印刷所 江 川 堂
東京市四谷區傳馬町貳丁目

